

展景

季刊

No.72



December 2013

目次

越中国 万葉のふるさと〈短歌〉	河村郁子	4
一弦琴〈俳句〉	新野祐子	6
すりおろしりんご〈短歌〉	布宮慈子	8
一周忌〈短歌〉	丸山弘子	10
石割桜〈短歌〉	結城文	12
いつまで続く〈短歌〉	池田桂一	14
辛夷〈短歌〉	小野澤繁雄	16
近江気まぐれ文学抄 41 岡部伊都子『観光バスの行かない…埋もれた古寺』		
「眉高き十一面観音」	新関伸也	18
私の日記帳	松井淑子	22
〈那須通信17〉雪の日	加藤文字	24
対詠「きびんいかか? PART 48	丸山／布宮／小野澤	28
前号作品短評A		30
前号作品短評B		32
エッセイ教室「清紫会」の作品より		
赤耳亀	小野澤繁雄	34
万葉集全二十巻朗唱の会に参加して	河村郁子	36
ケンちゃん	丸山弘子	40
「清紫会」だより		43
無二の会短信		44
編集後記		48

越中国 万葉のふるさと

河村郁子

秋かすむかなたに立山連峰のうすき稜線迎へくれたり

新湊^{しんみなと}道の駅より旅情あり しろえびづくしの昼餉に足らふ

万葉集の資料文献随一と歴史館の人誇らしく言ふ

ゆくりなく「中西先生」と声に出る論文資料最多なりせば

展示には古写本に越中万葉歌 映像見つつ時を逆^{さか}りぬ

しまらくを万葉びとに安らぎぬディープジャパンの詩情まとひて

歌碑めぐる二上山の万葉ライン武川^{むかは}忠一のみ声しのびぬ

「万葉集何番の歌と言われれば、すぐに言える」と言ひぬしわが師

歴史館の万葉の庭に拾ひたりほどよく虫の食ひたる枯葉

満ち足りて歴史館出る私を包みくれたるかをり木犀^{もくせい}

一弦琴

新野祐子

肌はだへより頭蓋骨透く白露かな

小櫓の実握る小熊の掌てとなりて

鯖雲に並ぶ風力発電所

水澄みて一弦琴のはるかより

雁かり渡し母の遺品を埋む旅へ

十月のパラグライダー着地せず

遠来は君と星々菊きくなます膾

秋の蚊や書架にあふるる紀行集

即身仏百年後掘る野分のわきなか中

干柿のひとつ星座に紛れ込む

すりおろしりんご

布宮慈子
やすこ

つくづくとテレビの音が嫌になり八畳間の画面くらくら^な風^なぎゐる
すりおろしりんごを匙^{たう}に食^{たう}べしをうふうふ笑ふ紅玉食みて

牛膝^{みるのこづち}だれに連れられお出でとや部屋に一粒ありて動かず

鬼ぐるみ轆^ひかせむとして影一羽フロントガラスを過^よりてゆけり

幾^{いくたり}人も遠距離介護なしゐるは紅葉^{もみぢ}せる世を眺めてをらむ

夕べ行くと告げればわれの運転を案ずる母はまづ飯を炊く

板張りの廊下の隅のひとところ音がするなり兄もさせきか

糸尻を汚さぬやうに片づけむ祖母の声するとき夜なれば

母の家の柱^へ時計が五時を打つ四時までのおと耳は聞かざり

去年^{こぞ}死にし猫を埋めたる土は早^{はや}ましろきせかい受け容れむとす

一周忌

丸山弘子

八十半ばの夫の言動憂ひある友の電話は切実にして

肝臓を友も病みつつ脳梗塞の夫の介護は二十年になる

外廊下の工事の見積り嵩たかしそれでも修理をせねばと思ふ

二槽式にこだはりありて洗濯機を種類少なき中より選ぶ

みつけたるタニタ食堂監修の即席味噌汁購ひてみる

無農薬の野菜とともに桔梗屋の信玄餅給ぶきなこが匂ふ

やうやくに吾を認めたるか友の犬けふは吠えねど体かたく居り

胃検診に行く道にして植込の金木犀の香につつまれてゐる

夏の花と思ひをりしが鉢植のハイビスカス十月末の華やぎ

つき合ひはほどほどでよし十二月たちまち弟の一周忌がくる

石割桜

結城 文

川床は半ば透きつつゆるやかに北上川へ向かふ水音

河川敷は犬の散歩にジョギングに川ありて潤ふ盛岡の暮し

岩木山を望むこの地に輩出す賢治 啄木 稲造 原敬

「岩手山公園」といふ文語詩は賢治終焉一月前の作

不^{こず}来^{かた}方の城址に寝ころぶ啄木の「十五の心」の歌碑に遇ひたり

後の世の随所のブーム知らずして若く貧しく啄木の死す

つひの床にありてもつねにハングリー 心は熱く燃えてをりけむ

あの時^{とき}世^よに「時代閉塞」の論書きぬロマンの歌とともに忘れず

石割りて咲く盛岡の桜木の花に遇はなむ来春こそは

帰化したるドナルド・キーンの「啄木」を聞かむと二千人が集ひぬ

いつまで続く

池田桂一

爪痕を色濃く残し震災の蔵壁は剥がれて二年半を経る

わが家の柱は西に傾きて下側隙間を風の通り来く

あと幾年経てば百年その蔵は瓦の屋根の崩れて立ちぬ

予断なき余震のいまだ続きおり強き揺れにも逃げることなく

怖さゆえ椅子に爪立てすがりつく仔猫をかばう揺れ続きいて

慣らされてゆくのかペットの如くにて余震にも席を立つことのなし

慣れてゆく事象にあえて逆らわず日毎に地震の恐れ薄らぐ

報道は原発事故のみ繰り返す地震に遭いたる者置き去りに

祖母言いいし「この地は岩代いわしろ 大地震おおなの恐れはいらぬ」 ことば空しき

逆らわず生きる余生を吉として自然のままにコーヒーを飲む

辛夷こぶし

小野澤繁雄

人住まぬ家のあわれさととりわきて庭に自転車朽ちつつあるは
相對に広き道をば確実に渡る毛虫は久しぶりなり

しらぬ花しる花ときて大振りの花足が止まれば犬に抜かれて

沼かこむ声は移りて夏の間は高低遠近せんせい蟬声せみこゑが占む

たしかにも「おさなごのこぶしのような」実の下がるみゆ秋のはじめに

水のべに休めるは郵便配達夫一ブルジョワの風たばこに貰もらもつ

雨が止んで足が止まっていた人ら一斉に出る多く犬連れ

なんとなく橋のたもとにきていたる水の増したる川みんなためか

住み代わりせし家なるや家すそに色ある小物細々置かる

ハイツからノース・ブリッサまでの距離ここに単純に鈴木アパート

岡部伊都子『観光バスの行かない……埋もれた古寺』

「眉高き十一面観音」

新関伸也

一步、薄暗い堂内にはいつて思わず「まあ……」と声をあげる。正面にすらりとたった美しいおひと。それはその前に献じられたばらんの葉をかきわけて、今にもこちらに歩みよりそうなゆらめく気配を感じさせた。これは美しい方に会ったものだ。まだその眉目を判然と見きわめぬ先にこみあげてくる印象。それはこんな方がこんなところにいらしたのかという、悲しみにも似た感動なのである。

高月町渡岸寺とがんじにある十一面観音立像は、日本で最も優美な観音であると言われ、今日まで多くの人々を魅了した点で右に出るものはあるまい。

三十数回にわたって渡岸寺に足を運んだ井上靖は、この観音に触発されて『星と祭』を著し、また白洲正子も『十一面観音巡礼』で、たびたびこの寺を訪ねて「日本の中でもすぐれた仏像の一つ」と著し、背面の「暴悪大笑面」に心を寄せている。その魅力や知名度は、作家や著名人のおかげで

広まったが、それまではひっそりと村の社で守られてきたみ仏であった。

ところで井上や白洲もさることながら、もう一人早い時期にこの観音の魅力を書き残している岡部伊都子いづこを忘れてはならないだろう。岡部は一九六〇年〜六一年に、美術雑誌「藝術新潮」に『観光バスの行かない……』シリーズで、ひなびた古寺と仏を紹介する随筆を連載した。観光バスで団体がドツと押し寄せる有名な大寺の様子に憤慨し、気ままに関西を中心とした古寺を巡り歩いてまとめた紀行文である。その最終章において「眉高き十一面観音〈渡岸寺〉」と題して紹介する。

冒頭は、高月駅から道に迷いながらたどり着いた渡岸寺で、初めて観音に対面したときの印象を綴った場面である。古美術の見識を披露するでもなく、また、美術史の解説のような精緻な言葉でもない。少女のような素直さでほとけに語りかけた、素の言葉である。

岡部は、さらに次のように十一面観音を形容する。

「美しいおひと」

「けぎやかな眉を高くあげた美女」

「近づく者をおどろいたようにみつめている瞳ひとみ」

「右目はまん中にあるが左は鼻すじにひとみがつまっている」

「人間的な、肉厚い唇と、ノーブルな鼻の形」

「はえぎわの髪の毛のゆたけさも、情の濃さをあらわしている」

「腹部は、女ながらも眺め入って飽きない」

これらの言葉一つ一つは、十一面観音というよりも麗しき女性と邂逅かいこうしたような書きぶりである。こうしてみると岡部の鑑賞法は、稚拙にも思えてくるが実に正しい見方である。まずは、自分の眼でしっかりと見ることで、そこから感じたり思ったりすることから、鑑賞が始まるのである。そこには、みずみずしい感性や率直さがある。感じる前に、知識で見えてしまいがちなわれわれには新鮮である。

確かに美術品や仏像などは、知識や歴史を踏まえないと理解できないことがあるが、知識の羅列だけでは、読者に伝わらない。何がよさなのか分からない美術解説が多い中で岡部の各著書の文体には、ぶれない一本の強い縦糸がある。それは、まず自分の眼で真贋をしっかりと捉え、心に適うものを選択し、吟味するという縦糸である。その縦糸がピンとしているため、美しいもののすべてが横糸となって味わい深い言葉の織りをなしている、それが岡部の持ち味であろう。この強い糸をはることのできる岡部とは、どのような人物なのであろうか？

岡部伊都子は一九二三年、大阪市のタイル問屋の三女として生まれる。幼少より病弱であり、相愛高等女学校を結核のため中退する。婚約者が沖繩戦で戦死し、戦後すぐ結婚したが七年後に離婚。同人誌「文学室」に参加する。一九五六年ラジオ番組「おむすびの味」で認められ、その後、日本の美術・伝統・自然・歴史について細やかに書く一方で、戦争・沖繩・差別・環境問題などにも積極的に関わり、発言し執筆している。主要著作は岩波書店『岡部伊都子集』（全五巻）や藤原書店『岡部伊都子作品選・美と巡礼』（全八巻）がある。二〇〇八年死去。

このような岡部がこの自著を「しろうとの迷いをそのまま」書いたものであると「あとがき」で述べている。その迷いは、一九六〇年という歴史的な場面に遭遇していることでもうなずける。この年は安保条約改定の年で、国中が騒然として揺れている中で、民衆の一人として静かに寺々を巡ってよいものかどうかという、苦悩である。この苦悩は、強烈な自身の戦争体験による人生観の転換から来るものであった。

それは岡部の婚約者であったマルキスト木村邦夫の戦死を抜きにしては語れない。木村は出征前夜、岡部に「天皇陛下のためには死ねないが、君のためなら死ねる」と告白する。その時「わたしだったら、喜んで死ぬけれど」といって木村をたしなめたという。最愛の女性だけに打ち明けた最後の言葉の意味を解せず、また「なにもかも、すませて征きたい」といって岡部を抱きしめたが、その気持ちを解せず受け流してしまう。やがて、木村は沖繩戦で米軍に追い詰められ自決する。岡部はそのことを後々悔やみ、「自分こそ戦争の加害者であった」という贖罪しよくざいにさいなまれる。生家の破産や結婚の失敗などを経て、この贖罪を自覚したときから、彼女のその後の生き方は定まったのである。まさに強い縦糸をはるように。

だいぶ前のことだが、引越しに先立って押入れの片付けをしていたら、奥から、ほこりだらけになった十冊ばかりの大学ノートの束が出てきた。ごく若いころの日記帳であった。

どんなことを書いていたのかと開いてみたら、日々の出来事のほかに、将来への不安や人に言い負かされて反論できなかつた口惜しさなど、さまざまな感情の動きが細かい文字でえんえんと書き連ねられている。こんなことを書いていたのかと、馬鹿馬鹿しくも恥ずかしくもあって、小さく切りこまざいて、燃えるごみにして出してしまった。

日記がある時期で跡絶とだえているのは、多分それから先、仕事に追いまくられるようになり、書く暇がなくなったからだろう。

退職してしばらくしてから、また日記を書くようになった。日記帳は相変わらず大学ノートである。こんど再開した日記にはどんなことを書いているのかというと、これはもうほとんど備忘録である。

たとえば、病院にいったこととそのとき医師から受けた注意、友だちと会う約束をした時間と場所、クリーニングを依頼したと依頼した品物と仕上りの日にち、美容院に髪のカットにいったこと、などなどだ。

毎日のお天気と寒暖の程度のこととも忘れずに書く。とくに季節の変わり目に着るものを変えたときは、たいがい書いておく。

ついでに植物や動物のこと、たとえば金木犀や白木蓮、桜などの開花に初めて気付いたとき、蟬の声や渡り鳥の姿に気が付いたときも書く。

こういった内容の日記なので、ときどき前のページを引っ繰り返して読むことがある。

最近も、去年の今ごろの気候と、どんな服を着たかを知るために日記帳のページをめくっていたら、去年金木犀の開花に気付いたのは十月五日とあった。今年は十月十二日である。今年は暑さが長引いたから、それで開花が遅れたのだろうか。

ところが、山と里との間で渡りをするヒヨドリの声を初めて聞いたのは、去年も今年も十月十二日となっている。暑さ寒さには関係ないらしい。まさかヒヨドリがカレンダーを調べて里に下りてくるわけもないのだが、それでも、山の岬ねぐらの木の枝に小さなカレンダーが掛かっかつていて、その前で小首をかしげているヒヨドリの姿が、なんとなく想像されるのであった。

加藤文子

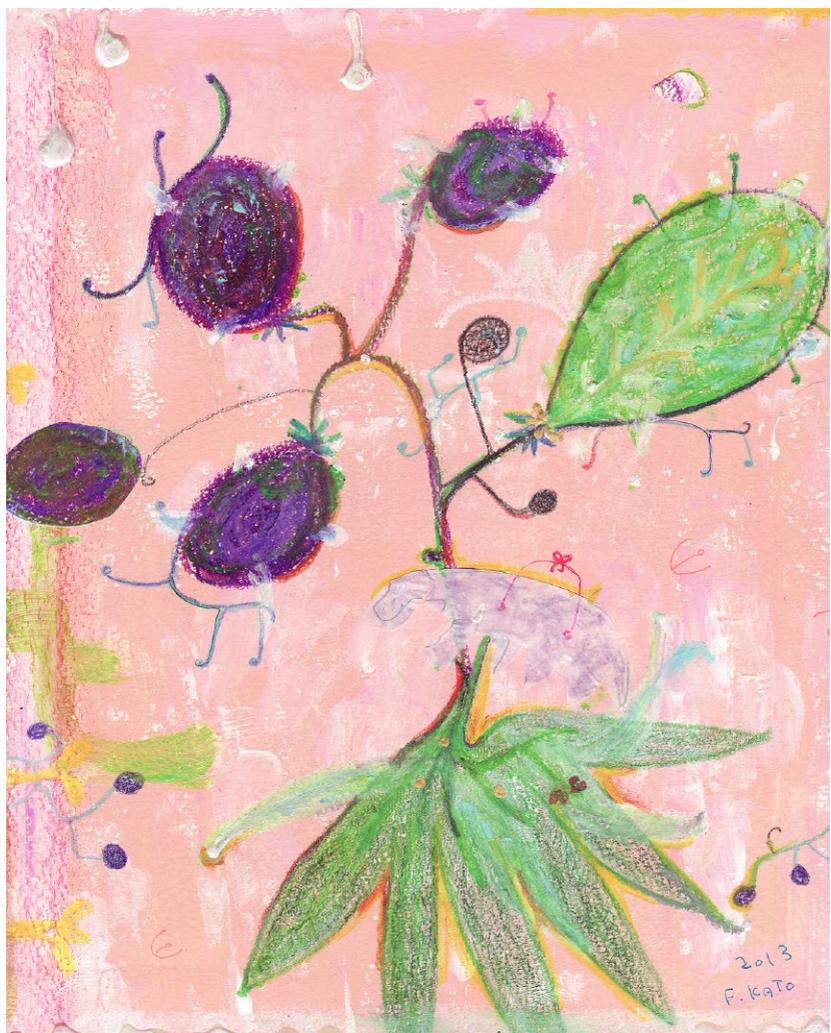
冬の朝は、特に天気が気になる。起きぬけ、水滴でくもった窓ガラスをこすって外をのぞく。どうしてだろう、気がつけば毎朝同じ動作をしている。

雪が積もっている。今日は大雪だ。雪の日の静けさには、大気が音を吸い込んでしまっているような不思議な感覚がある。

とにかく雪かきをしよう。夫は早くも外へ出る準備をしている。こんな日は寒さで硬くなった体をほぐすチャンスでもある。汗もかける。

まず、^{おもや}主家から温室へ通える路をつくる。^{みち}外が雪でも温室の中の植物には、水をやらなくてはならないからだ。だから、不自由なく植物が見守れるように、温室周辺の雪は取り除いておく。それも、柔らかなうちにおこなわないと、午後には凍ってしまうこともあるので、要領よくすすませていく。

ひととおり作業を終えると、夫はカメラと三脚を持ち出して撮影を始める。撮影のために、庭先



にやきものの作品や盆栽が、かわるがわる運びだされていく。なかなか忙しい。

特に大きな盆栽は、雪をバックにすると、フォルムがくつきりみえて、シンプルで美しく撮れる。勢いに乗った夫は、リュウビンタイなど、南の島の植物まで室内から持ち出している。いかにも寒そうでハラハラする。

こんなふうに、雪の日にたくさんさんの盆栽たちが撮影されてきた。黄色の花が咲き出しそうなヒイラギ南天。紅白の実の生る万両、紅葉した葉が美しい雪柳や、りりしく枝をのぼす黒松も……まだまだいっぱい！ どれも、とっておきの冬の姿で写っている。

それから。

一日が終わる頃、雪一面の青い風景を窓越しに見ていると心地よくて、心に音楽が浮かんできたりする。

ミルトン・ナシメントやトゥーツ・シールマンズのブラジルの深い森や谷を渡って行くような調べや、ブルース・コバーンの素朴な唄とアコースティックギターのつま弾きとか、聞きたくなる。

雪道を自転車に乗ってたり、雪原を歩くブルース・コバーンが写っている歌詞つきのブックレットを思い出して、古いレコードをひっぱり出す。

雪に誘われて送る一日も、また、すばらしい。

O N M
丸山 弘子
布宮 慈子
小野澤 繁雄

待つうちに建て終りしか道よりに庭仕事など始まっている 9月16日 O
 利用者の多かりし駐車場閉鎖されマンション建つと基礎打ちはじまる 9月26日 M
 ベランダの水耕栽培コリアンダー、バジル、ルッコラ勢ひを増す 10月1日 N
 自転車に追い抜きたりし少女子はあるかなきかの香残して 10月10日 O
 大丈夫かと問ふに少女うなづきてリュックの背を見せ強風の中ゆく 10月16日 M
 番号と名前をもちて接近す台風27号「フランシスコ」 10月21日 N
 雨上がりとはならなくて雨の間南海上に台風ふたつ 10月22日 O
 27号台風すぎて快晴来む年の花たのみ水仙の球根を植う 10月30日 M

街の木々色づくさまを一望すわが体ビルの五階にあれば 11月2日 N
 天空より降りきたる枯葉らをつどに幼子拾い上げゆく 11月10日 O
 わが庭の銀杏まだまだ緑にて今朝もひよどり声たかく鳴く 11月15日 M
 遠き日の夢の欠片を見るごとくポプラ並木の傍らを過ぐ 11月20日 N
 「いつもの場所で待っていますジョージア」自販機にわれも待たれる人か 11月23日 O
 アイスクリームの好きな犬らし飼主の与へる一さじ一さじを待つ 11月30日 M
 手渡すは如何なる社会か引越しのときに出できし子の銀の匙 12月5日 N
 花ふたつより支柱のものし枯れんとする花それら支えて 12月13日 O

●織物の卸いとなみしわが父は博物館に吾を伴ひき

河村郁子

タイトル「織物」の二首目。この歌は過去のことだが、この一連を読むのにもっとも必要な情報を提供してくれるようだ。河村さんの歌は概して親切で、判りにくくないが、一連での歌の出し方がいいのかな。五首目に置かれたこんな歌が現在で、全体として前後半の歌を支えている。

歌会終へ速歩に向かふ「龍村展」父の思ひを抱きて巡る

「速歩に向かふ」というところが現代的か。織物、帯、打ち掛け、とあるので、「龍村展」もどういうものか見当はつく。このあとの歌に、わが帯「龍村の帯」、の語句がみえる。

「龍村平蔵『時』を織る。」展が日本橋高島屋で行われたようだ（朝日新聞）。創業百二十年を記念し、初代から四代までの足跡をカバーするという催し。どの歌も、きっちりとした歌い方に、心をのびせた。

●まづ触れてみよと君から山椒魚

新野祐子

「みよ」は命令、あるいは慫慂。そのどちらでも句は読める。君から触れてみた、もう一つは「君からまづ触れてみよ」。山椒魚にはちよつと触れがたい風情があるのだ。

この以前の句は三つまで岩魚の句で、岩魚の場合は触れるというような悠長なことではなく、い

ただく。

青淵の岩魚手合せいただきぬ

この後の句「雪溪の奥は激流かも知れず」の想像、その次の句「無抵抗主義者のやうに泳ぐなり」の眼前、も面白い。そのような句のあとのこの句に力技を感じた。

鳥獣の子を捜す声梅雨出水

●シャーシャーと蚕が桑の葉食む音す『牧野物語・養蚕編』に

布宮慈子

一連タイトルは「ドキュメンタリー映画」。最初の三首でイベントの全体の感じは掴める。朝日新聞でも記事になっていた。NPO山形国際ドキュメンタリー映画祭が主催し、七月の二日間で「山形国際ドキュメンタリー映画祭の生みの親」映画作家 小川紳介 『上山』が舞台のドキュメンタリー六作品を公開（する）」というもの。作者はその六作品をすべて観たらしい。

『牧野物語・養蚕編』は、九首目の（参考上映）『HARE TO KE 小川プロダクションとの出会い』というしよに二日目に上映された。

「小川プロが、山市（牧野）にプロダクションごと移り住み、自給自足の生活を続けながら山形で映画を撮り続けていた」というようなことを、ボクはしらなかつた。一連は、短歌のやり方で映画を、また映画作家を語る。記憶の一部を通して。

●比企郡の山の中にペンギン・ヒルズありフンボルトペンギン多くすむ 小野澤繁雄

埼玉県こども動物自然公園にあるペンギン・ヒルズ。一瞬、「ヒルズ族」という六本木ヒルズの派手な人たちを想像してしまうが、あくまで地味なペンギンのいる丘であろう。フンボルトペンギンは氷や雪原ではなく、温帯域のチリ、ペルーの岩場や緑のあるところで暮らしているそうだ。埼玉の山とペンギンの意外な取り合わせが固有名詞の利いた一首となった。旭山動物園をはじめ、動物園や水族館が独自の見せ方を工夫するようになった。生き残りをかけた企画なのかもしれない。ウマとロバのちがいを説明し、みみ、たてがみ、しっぽで見せる

●疎開地の庭に鮮やかなりしこと思ひ出づ仏前のトサカケイトウ 丸山弘子

タイトルの「夏」に添った歌が並ぶ。掲出歌は、切り離しがたい「戦争と夏」をトサカケイトウの鮮やかさで想起させる。色は、赤か濃いピンク。疎開地とはどこだったのか？ 何歳のとき？ 親元を離れてどんな生活をしたのか？ 食べ物は何？ 数々の疑問がわき、時代の空気を思う。

朝より削りの音の絶え間なくときをり足場を移動する見ゆ
改修工事は夏場が旬よ駅前二棟のビルの作業はじまる

「削り」という語や改修工事にも旬があることなど、新鮮な視点と思う。

●曲がり角の向こうに明日を約しつつ夏の夜の月ビルに隠るる 結城 文

人間世界には関わりなく、日は沈み日はまた昇る。しかし、明日は間違いないから来るのだろうか？ 乾ききりし枯葉の音はいつまでも街ゆく私を放してくれない

迷ふなど道路標識の指させるそのいづくにも行き先はない

六首目と、八首目の結句に否定語がある。ひとはつまり、陰と陽、ネガティブとポジティブのあいだで生きている存在であると思わせる歌だ。生にやや肯定的に詠った次の一首はどうか。

薔薇窓を透きくる光の色もちて言葉しづかに立ちあがり来よ

天から地までの透明な光の束が見えるようだ。祈りに等しい言葉が生まれようとしている。

●ねむの木の葉揺れに蟬は飛び立ちぬ気たるき午後の風吹きくれば 池田桂一

「蟬声」というタイトルに関連する一首。ねむの木と気たるさが呼応して、時間が止まったような感じを受ける。考えてみれば、蟬の一生というものも不思議だ。地上に出て鳴くときには、死を目前に控えているようなもの。ひとの一生とは、あまりにも違う時間の流れである。

山蟬のジイジイと鳴くしばらくを木蔭に寄りて耳を澄ましぬ

ミンミンの声ひたと止む静けさに記憶の中まで空白となる

木と一体になって蟬の声を聴いている様子。ミンミンゼミのやかましい声がやんで、急に静かになる。すると頭の中までもが白くなり、何もなくなったように感じられるのだ。

赤耳亀

小野澤繁雄

去年の夏の頃、職場前庭の池に誰かがカメを入れた。前後して金魚も入れられた。不思議にいつも入れた人が目撃されていない。ところで、誰にとっても久しぶりのカメだった。一〇センチくらいの大きさだ。

関心はなんといつても金魚が集まっていたが、最初の冬越しが無事におわり、金魚も、色、かたち、持っていたものがハッキリしてくると、つまりは大きくなったのだが、カメも注目されるようになった。日がな甲羅干ししているので、目につきやすいのだ。

カメをみていたくて、親がいくら呼んでも、池のふちにすわりこんだままうごかない男の子、そんな情景を最近目にした。

冬中、どうなったか姿をみせなかったので、皆でいろいろ想像した。心配したというのとは違う。

出ていったんじゃないか？ 死んだんじゃないか？ とか。今は、なんだか存在感がある。

ネットでミシシippアカミミガメということをした。外来種である。雑食性。

死んだセミを食べているところが用務員さんに目撃されている。金魚は襲わないようだ。大いに疑われたが、冬眠明けに金魚の数が最終的に戻ってきたので、疑いは晴れた。

かたい甲羅の下でどうやって成長するんだ？ こういう疑問が起ころべくして起こった。

脱皮して大きくなるという、これもネットからえられたもので、記事は事務室に張り出された。

そういうするうち、つぎのような結論になった。日干しして固くなった甲羅が剥がれ、柔らかい新しい甲羅ができるときに、からだを大きくする。大雑把に言えばこうだ。

そうすると甲羅干しは、怠けているのではなく、成長するのに必要なことなのだという事になった。このところ、甲羅の一つ、二つが剥がれかけている。そんなことが、池のほとりでゆっくりと話題になっている。

万葉集全二十卷朗唱の会に参加して

河村郁子

十月三日、秋の薄日の差す富山空港に着いた。
神通川の河原に一本の滑走路があり、ここが「キトキト空港」の名で親しまれている富山空港である。

私は、NHK学園の短歌講座が企画した「高岡万葉まつりと越中国の風土を歩く」という国内スクーリングに参加した。

高岡市では「高岡万葉まつり」が催されていて、その中に「万葉集全二十卷朗唱」が組まれている。今年が第二十四回に当たり、十月四日から三日三晩の昼夜の通しで行われる。

全国からの公募者たちの中で、私たち一行の中からの朗唱希望者十二名には、「四日、十七時三十分より、万葉集巻三・三八八番から四一一番」と割り当てられた。

高岡市には奈良時代に越中国（現在の富山県全域）の国府が置かれていた。天平十八年（七五六）に、大伴家持が赴任してきて、ここで五年間執務した。

二十九歳であった家持は、五年間の滞在中に「陸中万葉歌」と称されている二百二十三首を万葉集に収めている。この中には、若くして逝ったをみなめ（妾）への哀悼、故郷への郷愁、坂上さかのうえのおほとめ大嬢への慕情を詠んだ優れた和歌がある。

時はしもいつもあらむを心痛くい去く我妹わが妹か若き子置きて〔四六七〕

玉くしげ二上山に鳴く鳥の恋しき時は来にけり〔三九八七〕

かくばかり恋ひつつあらずば石木にも成らましものを物思はずして〔七二二〕

富山県高岡市は美しい自然に恵まれている。

富山湾（英遠の浦あをのうら）に面した雨晴海岸（渋谿の磯廻いそみ）しづたにのいそみ）からは、海拔三千メートル級の立山連峰の全景が遠望できるし、庄川（神通川）の清流は数々の動植物を育んできている。市内には奈良と同じ名前の二上山があり四季の移ろいを満喫できる。

家持は、この地で独創的な和歌の境地を拓いたと言われている。家持は赴任早々に誘われて海を見に行った。

馬並みていざうち行かな渋谿の清き磯廻に寄する波見に〔三九五四〕

万葉集には家持の和歌四百七十三首が収められている。この数は万葉集の詠み人の中で最も多い。万葉集の最後の四五一六番は、家持の名歌で閉じられてある。

新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ古事よごと

こうした万葉集の故事から、高岡市はこの街を「万葉のふるさと」「万葉集終焉の地」と銘打って万葉集の遺産を護り続けている。

万葉歴史館には、万葉集の古写本（桂本、金沢）はじめ貴重な文献や資料が豊富に所蔵されている。映像やオーディオも活用して立体的な展示が成されている。館内の万葉庭園には、万葉植物が植えられている。館長と学芸員が、資料の活用方法も含めて、誇らしげに案内してくれた。

秋の日がとつぷりと暮れた頃、私たちの朗唱が始まった。

加賀前田家ゆかりの高岡城跡の古城公園の池の上には精霊流しのような灯りが浮かび、正面の水舞台上は華やかな万葉調に飾られ、鮮やかな照明に映えている。

私たちは貸衣裳の中から夫々に好みのコーディネートをした万葉時代の衣装を着ていた。誰もが万葉人になったかのように落ち着いて見えた。昨夜の歌会と玉井清弘同行講師の講義の後で読み合わせをした際に、「大きい声で」のご指示をいただいていたからか、誰も緊張せずに各自の考案を

活かした朗詠調、吟詠調にと実力を発揮することができた。

私が朗詠したのは、四〇五番と四〇六番の二首だけであったが、四〇一番の詞書ことばがきから読み継いでゆくと、気楽な宴の席での和歌の遣り取り取りであると解ったので、打ちとけ合っている座興の雰囲気をも汲んで、ゆったりと、大きな声で少し会話のリズムも加味して朗詠した。

大伴坂上郎女の親族と宴する日に吟へる歌一首

山守のありける知らにその山に標結しめゆひ立てて結ゆひの恥しつ〔四〇二〕

大伴宿禰駿河麿の即ち和へたる歌一首

山主やまもりはけだしありとも吾わが妹子こが結ゆひけん標しめを人解かめやも〔四〇二〕

大伴宿禰家持の同じ坂上家の大嬢に贈れる歌一首

朝あに日ひに見みまく欲ほりするその玉をいかにせばかも手て離かれざらむ〔四〇三〕

娘むすめ子の、佐伯宿禰赤麿の贈れるに報へたる歌一首

ちはやぶる神の社し無なかりせば春日の野辺に粟撒かましを〔四〇四〕

佐伯宿禰赤麿のまた贈れる歌一首

春日野に粟撒けりせば鹿待かちに継つぎて行かましを社やしろし怨うらむ〔四〇五〕

娘むすめ子のまた報へたる歌一首

わが祭まつりる神にはあらず丈夫ますらふに着きたる神そよく祭まつりるべき〔四〇六〕

しばらくぶりでケンちゃんに会った。姉夫婦の二男である。

小学校低学年までは、毎年お正月と夏休みに泊りに来ていた。口数の少ない子供で、いつもニコニコしていておとなしかった。

後年、その口数の少ない子供が就職した先が自動車会社で、それも営業部だ、と聞いた時はおどろいた。あの無口な人に営業がつとまるかしら、大きなお世話だが心配した。

それはともかく、この人が大泣きをした時のことを思い出した。

あるお正月のことである。毎年、姉弟が子連れで集る日があった。母に年始の挨拶をしに来る日だ。来る人が来て、正月の挨拶とそれぞれの近況報告がすむと、子供たちにつき合うことが恒例になっていた。子供たちはそれがたのしみで待っているのである。大人も結構たのしみになっていた。全員で十人くらいになった。

まずはトランプで、ババ抜きか七ならべではじまる。勝負する時は大人も子供もない。ただ、一番小さいケンちゃんだけは母親と一緒に、つまりオミソであった。

まず、ババ抜きだ。その日の係が、配るトランプの中から一枚抜いた。ジョーカーは使わない。カードを配ろうとすると、突然ケンちゃんが言った。

「お母さんと一緒じゃなくて、今日からボクは一人でやります。ボクにもトランプ配ってください」
びっくりした母親が、

「一人でやるのは来年からにしない。今日は、皆のすることをよくみて研究しなさい」

「今日から一人でやります」

決意はかたい。

ケンちゃんに説明があった。ゲームのやり方は大体分っていると思うけど、勝つこともあれば負けることもある。負けた時は大人だって口惜しい。泣きたくなるがガマンする。ケンちゃん、配られたトランプの最後の一枚を持っていた人が負けです。もし負けても絶対に泣かない、と約束できませんか、と言われたケンちゃん、

「ボクは泣きません。約束します」

カードがケンちゃんにも配られた。うれしくてニコニコしている。

ゲームが開始された。はじめは皆対等であるが、手持ちのカードが少なくなってくると、おおよその戦況が分ってくる。かけひきの出来ないケンちゃんは不利だ。

分っていたことだが、最後の一枚はケンちゃんの手に残った。

ずいぶん分っていたが、ケンちゃんは泣き出した。普段、聞いたこともない泣き声のその激しい

こと。なぐさめようもなく、ケンちゃんとお母さんを残して、大人も子供も隣室へ退散してしまった。

「どんないきさつがあつて、一番二番の話になつたのかは分らない。」

ケンちゃんは小学生になつていた。ある日、学校から帰ってくるなり言った。

「お母さん、どうしてうちではボクだけが二番なの？　ボクが一番がいいんだけど」

突然で、何を言っているのか分らなかつたそうだが、学校で家族、両親や兄弟のことを勉強したのかと思ひ、

「ケンちゃんにはお兄ちゃんがいるでしょ。お兄ちゃんが生れてケンちゃんが二番目に生れたからよ」

「それは分つているけど……。だけどボク本当は一番がいいんだ。二番じゃ駄目なんだよ」

そう言つて大泣きするのだそうだ。

姉のところは、夫婦と男の子二人の四大家族である。夫婦は長男と長女で、ケンちゃんの言い方からすると、二人とも一番である。そしてこの二人の長男、ケンちゃんの兄だが、この人も一番である。自分は二男なので二番。理屈では分つているが面白くない、許せない、というのだろう。

いつまでも泣いているので、「ケンちゃん、ケンちゃんが二番ということは、どんなことがあつても変えられないのよ。でもお母さん、ケンちゃんもお兄ちゃんも、二人とも一番だと思つて可愛がつているわよ」

何を言つても今は分らない、と思ひながら、それでもそう言つてなぐさめたそうさ。

私は子供を育てたことがないので、姉はなにか感じることもあると、話してくれる。そして、今回は参つたわ、と言つていた。

「清紫会」だより

◆第110回 平成二十五年八月十五日(木)、会場・アカデミー湯島五階洋室

今月は、いつも使う文京シビックセンター内の会議室がどこもいっぱい、アカデミー湯島という初めての会場に割り当てられた。本郷の湯島天神脇の路地の奥にあるせいか道がわかりにくく、皆さん困られたようでお気の毒なことをした。

〈提出作品〉市川茂子・今年の朝顔／小野澤繁雄・散歩コースのひとつ／林博子・暑い！／丸山弘子・ケンちゃんⅡ

◆第111回 九月十九日(木)、会場・文京シビックセンター三階A会議室

〈提出作品〉小野澤繁雄・赤耳亀／林博子・ハンドバッグ／松井淑子・知り人か？

◆第112回 十月十七日(木)、会場・文京シビックセンター三階B会議室

〈提出作品〉河村郁子・万葉集全二十巻朗詠の会に参加して／林博子・声の記憶／松井淑子・私の日記帳
／丸山弘子・てんかん (松井)

◆昨夜の強風は、硝子窓が破れるのではと心配するほどだった。この時節になると、毎年決つての風なのだが、今年はこれまでに経験したことのないような強風だった。強く吹き続くのではなく、突然にドカンと硝子窓に風が吹きつける様相は、明らかに異常気象としか思えない。テレビのニュースでは、竜巻の言葉を目にした。各地での雨の降り方も尋常ではない。朝食を済ませてから、新聞を取りに表に出ると、玄関から門までの石畳には、櫛の落葉が、びっしりと茶色の絨毯のように積っていた。その日の落葉掃きは、雨上がりでも三倍の時間がかかり、コンテナで六箱も運ぶ重労働になった。

池田桂一

◆休日や遅番の日の朝の散歩が唯一とっていいような楽しみになっている。コースは、その日、その場でも変わるが、イチヨウが色づいてきた、など小さな変化に気づかされる。橋下の鯉に食パンをちぎって投げている老人と今日は声をかわした。

小野澤繁雄

◆万葉集の中に、春山の万花の艶、秋山の千葉の彩と春秋の趣を取り沙汰した宴の即興歌がある。額田王の「……秋山の木の葉を見ては 黄葉をば 取りてそしのふ 青きをば 置きてそ歎く こそし恨めし 秋山われは」と応えた長歌の最後の四句が好きである。

十月三十日に国立の大学通りで会食をした。二階席だったので、窓越しに、並木の桜が目交に見える。まだ葉は青いが、葉の間から空が窺える。桜紅葉の時をじっと待っているかのようなのである。「こそし恨めし」を思い出した。いまだ青を保っている切なさに心を向けている修辞に共感できたことに感動し、数枚の葉を息をつめる感覚で見つめていた。

河村郁子

◆今年もあとわずかである。来年の手帳やカレンダーが書店に並び始めた。カレンダーは一月から買い求めるが、手帳は仕事柄、四月始まりである。今年、伊勢参り時に「平成二十五年神宮暦」を五百円で購入した。表紙に朱書きで「第六十二回神宮式年遷宮齋行」とあり、歴史的な年でもあった。紀元二千六百七十三年である。他に、祭事はもとより旧暦、満潮干潮、月出・入、日出・入、農作業、年中行事、神棚のまつり方など情報満載であり、見ていて飽きない。これはやっぱり、カレンダーではなく暦である。

新関伸也

◆先日仲間たちと福島に行くことになり、栗子トンネルの点検作業のため渋滞する国道を避け、抜け道を知っているという友の運転で、街灯もない狭い山道を走った。他に車は全くなかった。一時間ほど進むと道幅が広くなり、忽然と巨大ダムが現れた。摺上川ダムという。予備調査から着工まで十二年、それから二十年かけて二〇〇五年完成、とダム事務所のパンフレットにある。ダム湖の底に沈んだ村の在りし日の写真が何枚も掲げられていた。失ったものが余りに大きいように思えてならなかった。その後、飯舘村へ。

新野祐子

◆近ごろ、カボチャのお化けの飾り物がよく目につく。ハロウィン（十月三十一日）の飾りらしい。ハロウィンはアメリカのお祭り、この日お化けに扮した子供たちが家々を回ってお菓子をもらうのだそうだ。うちの近所でもそういう子供を見かけるようになった。クリスマスやセント・バレンタイン・デー同様、このお祭りも日本に根づくのかもしれないと、やや呆れている。松井淑子

◆山梨県に住むMさんのお母さん、無農薬で野菜をつくっている。時どき連絡があると、Mさんは車でとりにゆく。持ち帰った中には、私の分も含まれていて、感謝感謝である。今回、興味深いことを聞いた。Mさんのお母さん、ご近所にも届ける人がいるそうだ。その中の一人に山羊を飼っている人がいて、野菜を届けにいくと、山羊が飼い主と競って寄ってくるのだという。無農薬が分らないよ、とはお母さんの言葉。人間は、これは無農薬の野菜ですよ、と言われなければ分らないが、山羊は本能で分るのだろうか。すごいと思った。丸山弘子

◆苫小牧美術博物館が主催した縄文土器をつくるワークショップに参加した。ハルとふたり、見よう見まねで土をこね、どうにか縄文土器らしきものを完成させた。さらに、焼き上がった土器を使い、海水から塩を取り出す企画も用意されており、もちろんそちらにも参加した。苫小牧港の海から抽出した塩をつけて食べるゆで卵は格別の美味しさだった。山内ゆう子

◆盛岡の街をすこし歩いて、なぜか分からないが、とても好ましいと感じた。コンクリートでかた

めていない川岸に、葦の生えているのにも、心やすらいだ。戦災で焼けていない街並みのしつとりと落ち着いたたずまい。しかし、この寒冷の地から、近代日本を代表する偉大な人物が輩出している。北の不思議なエネルギーに触れてみたい。結城文

◆『歌集 小さな抵抗——殺戮を拒んだ日本兵』（渡部良三著、岩波現代文庫、二〇一一年）という本がある。「場」（第二十三号、発行人、馬場昭徳）において、犬飼亮介さんが紹介していた。渡部良三は「一九二二年山形県生まれ。中央大学在学中に学徒出陣で中国・河北省の駐屯部隊に配属され（陸軍二等兵）、中国人捕虜を銃剣で着くという刺突訓練の時にキリスト者として捕虜殺害を拒否した。それゆえ凄惨なリンチを受けたが、その一部始終を含めて、戦場の日常と軍隊の実像を約七百首の歌に詠み、復員時に持ち帰った。戦後は国家公務員として勤務。定年退職後に本格的に歌集を編み始めた」。著者は一九四四年の春、学徒兵として中国の村に派遣され教育訓練を受けていた。そのとき自分に対するリンチ以外で、忘れることのできない経験をしたという。一つは捕虜の虐殺、二つ目は女密偵への拷問、三つ目は燼滅掃討作戦つまり皆殺しである。

朝飯を食みつつ助教は論したり「捕虜突殺し肝玉をもて」（捕虜虐殺）

反戦は父に誓いしひとすじぞ御旨のままをしかと踏むべし（同）

双乳房を焼かるとうにひた黙す祖国を守る誇りなるかも（拷問をみる）

逃亡の足跡残る厠より土塀をこえて麦青き野に（戦友逃亡）

炊事苦力ゆき交いざまに殺さぬは大人なりとぞ声細め言う（リンチ）

肉刺破れまめの肉刺も形なし六籽行軍三日つづきて（教練と生活）

苦力のかつぎ行きたる栢見つ聞けば慰安婦急死せるとう（同）

膠さえ折ると言わるこの厳寒耐えてオリオンの大き見上げつ（湖水作戦）

父の祈り高く響動す出征く夜唐津屋旅館の煤けし部屋に（学徒動員） *唐津旅館は山形市香澄町の旅館

転属は度重なるも恨むべき戦友ひとりなく黄河こえたり（徐州市にて）

「聖戦」の旗印かかげて罪もなき人死なしめし報いきたりぬ（敗戦す）

耳漏を癒しやりたる幼のひとり今日は愛ぐしき衣まといおり（同）

ざらめ雪はだらに残る峽の村学徒兵ひとりいま復員来つ（復員し故山へ）

戦争の責任ばかされて歪みゆく時代の流れを正すすべなし（極東国際軍事裁判始まる）

強いられし傷み残れど侵略をなしたる民族のひとりぞわれは（同）

前半「湖水作戦」までの戦地で詠んだ歌は厠の中で記され、復員時には手荷物検査があるため少しずつ軍衣袴に縫い込んで持ち帰ったものだ。信条により捕虜を虐殺しなかった良三。一方、残った家族はどうだったか。山形県西置賜郡津川村叶水（現、小国町）は内村鑑三の若き弟子が伝道に入った地である。特高犯は第二次世界大戦中の「国家総動員法」「治安維持法」下における思想犯の別称で、二法は個人の信仰も取り締まった。この法律により父・弥一郎が信仰のゆえに逮捕されると近郷の町村民は「米英のスパイ一家」として差別し、村八分を行ったのだという。

特定秘密保護法が参議院の国家安全保障特別委員会で強行採決された（速記録では「議場騒然、聴取不能」なのだ）。今の政治状況を考えれば、読むべき歌集ではないかと思う。（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊 展景 72号

二〇一三年十二月二十日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二ー一七ー二〇二

info@muninokai.com